

機関番号：32601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530700

研究課題名（和文） 子ども学の構成と展開に関する比較教育社会史的研究

研究課題名（英文） A Comparative Social History in the Configuration and Developments of Child Studies and Education

研究代表者

北本 正章（KITAMOTO MASA AKI）

青山学院大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：10186273

研究成果の概要（和文）：

「子ども学の構成と展開に関する比較教育社会史的研究」というテーマのもとに進めた本研究は、欧米各国で精力的に進められてきている子ども観の社会史研究の世界的な研究動向を構造的かつ領域区分ごとに詳細に検討することによって、わが国における新しい「子ども学」(Childhood Studies)がその学術的基盤の構築を目指す上で必要な構成カテゴリーと課題の所在を明らかにすることを目的とした。本研究では、「子ども学」の構成カテゴリーを「子ども観の歴史人類学」、「子ども社会学」、「子ども文化の学際的研究」の3つの領域の研究成果から再構成するとともに、少子高齢化社会における子ども理解の構造を「子ども学の構成と展開」という文脈で説明するために比較教育社会史的アプローチを試みた。

研究成果の概要（英文）：

This study that I was able to advance to based on the theme called "A Comparative Social History in the Configuration and Developments of Child Studies and Education" was intended to clarify the constitutional categories and the location of the problems by examining "the new child studies" in our country aimed at the construction of the scientific base, and by examining the global study on the trends of the social historical study of the children and childhood which has been pushed forward energetically in Western countries in detail structurally every domain division. In this study, I tried to reconstitute the configurative categories of "child studies" from three domains as "historical anthropology of the childhood", "child sociology", and "the interdisciplinary study of the child culture", and tried approach of the comparative social history of infant education to elucidate structure of the child understanding in the low birthrate and aging society in context of "the configuration and the development of category in child studies".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：子ども学、子ども観、比較教育社会史、子どもの発見、家族戦略、児童救済、捨て子、教育福祉

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究の学術的背景

本研究を設定するに至った背景には、次の2つの契機があった。第1の契機は、申請者がここ10年ほど取り組んできている子ども観の社会史研究の中で、1960年代以降の研究動向の全体を、従来の教育学の枠組みを再構成した上で、新しい「子ども学」の枠組みとして論点整理できる段階にさしかかっているのではないかとの着想を得ていることに起因している。このような着想は、イギリスのケント大学のH.カニンガムによる優れた分析[Hugh Cunningham, *Children and Childhood in Western Society Since 1500* (1995; 2nd 2005)]のほか、社会学では、過去40年間の子ども観史研究をふまえた、ロンドン大学のC・ジェンクスを中心としたグループによって、子ども観の「社会構成説」の理論構築[Chris Jenks, *Childhood*, 1996, 2nd. 2005]が試みられていることにも触発された。さらに、児童福祉史をベースにした研究で知られるカリフォルニア大学のP・S・ファスらによって、子ども観をめぐる学際的な研究成果を網羅した『子どもと子ども観の社会史百科事典』(全3巻)[Paula S. Fass (Editor in Chief), *Encyclopedia of Children and Childhood in History and Society*, 3vols, (2004)]がとりまとめられ、体系的な研究情報が整理されたことも重なっている。

第2の契機は、わが国における学問としての教育学の再編問題に関連している。すなわち、わが国では大学改革の趨勢の中で、戦後の教育学体系の見直しが進み、伝統的な教員養成指向を中心とした教育学部の縮小再編が見られる一方で、とくに近年では「児童文化」「子ども文化学」、あるいは「子ども学」といった名称での新しい学科や学部再編も進んだ。しかし、そこで示された「子ども学」の内容は千差万別で、一貫性と学術的構造がなく、子育ての技術的な側面に偏向したものや、幼児教育あるいは子どもの心理発達を名称変更したに過ぎないものなども目立っている。この傾向は、民間のシンクタンクが運営しているCRN (Child Research Network)においても、その目指す方向性は包括性に富んでいるものの、「子ども学」の学術的基盤の構築という点では未整理であるという印象は否めない。

申請者は、これまでに3つの科研費研究(1)「近代ヨーロッパにおける親子関係と子ども観に関する歴史人類学的研究」基盤研究C(2)平成9(1997)年度～11(1999)年度；(2)「ヨーロッパ中世と近代における子育て習俗

に関する歴史人類学的研究」基盤研究C(2)平成12(2000)年度～14(2002)年度；(3)「近代ヨーロッパの子育て習俗の社会史に関する図像学的研究」基盤研究C(2)平成16(2004)年度～18(2006)年度]を進める一方、代表的な研究書の翻訳出版にも取り組むなど、長らく子ども観史研究に従事する中で、わが国におけるこのような「子ども学」のあり方に注意と関心を払ってきたが、上述したような世界の子ども観史研究の動向を考慮すれば、今日わが国で進められている「子ども学」の再編には、子ども学自体の学術的基盤をいよいよ本格的に構築する時期に来ているのではないかとの着想を強く持つに至った。本研究のテーマを「子ども学の構成と展開」としているのは、このような「子ども学部」や「子ども学科」の再編の基本原則となる構成要素やカテゴリーを世界の子ども観史研究の成果から得るべきであると考えたからであった。

## 2. 研究の目的

(1) 研究の目的と範囲、特色および予想される結果と意義

A 本研究の目的は、過去40年間に進められてきた海外の子ども観研究の成果と課題を再確認した上で、わが国における「子ども学」の基本カテゴリーを構想し、「子ども学の構成と展開」の学術的基盤の再構成を試みることにある。

B 本研究の範囲は、時間的には3年を想定し、領域的には「子ども観の社会史研究」、「子ども観の社会学研究」、「子ども文化の学際的研究」の3つの領域をカバーして課題を追求する計画を立てた。第1に、これら3つの領域ごとの動向を、これまでの翻訳などによって交流を深めてきている海外の代表的な研究者とのAcademic Interviewによって全体傾向を再確認し、同時に必要な研究文献の収集につとめた。第2に、研究動向の詳細な分析作業を進め、「子ども学」の基本カテゴリーの整理と、「子ども学」の学術的基盤を構築するためのカテゴリー配置を考察することにした。そして、第3に、上述した3つの領域の動向から相互関係的なカテゴリーを総合的にとりまとめ、従来の教育学の枠組みを再構成すると同時に、新しい「子ども学」の枠組みとして論点整理することを試みることにした。

C 本研究の特色は、各国における子ども観

研究の成果を、「子ども学」の基本カテゴリーの抽出に向けて再構成しようとするところにある。また、比較教育社会史的な視点を持つことによって、単なる政策史分析や法制度史分析にとどまらない子ども観の社会的リアリズムを確保した上で、「子ども学」の学術的特性を明確にすることも特色である。この有効性は、これまでの子ども観の社会史研究の成果からも明かである。

D 本研究の予想される結果と意義としては、「子ども理解」を必須の条件とする高度福祉社会の教育の営みにおいて現実的な意味を持ち、21世紀を展望する歴史的洞察を得ることである。少子高齢化が欧米よりも急速に進んだわが国の今後の福祉社会においては、子どもの教育に対する文化投資はこれまで以上に高まるであろうから、その投資効果を総合的に評価するには「子ども学」の学術基盤が必要になるであろう。「子ども学」の構成を学術的に策定し、社会構造の中で意味づけておくことは、新しい時代の教育を再構成する上で避けては通れない研究課題であると考えられる。

#### (2) 国内外の研究動向における本研究の位置

子ども観の社会史研究は欧米ではすでに40年以上の蓄積があり、1990年代以降2000年代にかけては、子ども観の歴史人類学研究における「非連続(変化)説」、子ども社会学における「社会構成説」、さらには「子ども観の総合的な学際的研究」における、「非連続(変化)説」「連続説」「進化説」「社会構成説」などいくつかの学説と立場の総合化が進んでいる。そのような動向から「子ども学の構成と展開」を探ることは、わが国における大学改革に見られる「子ども学部」「子ども学科」再編に一定の方向性を示すことになるだけでなく、世界の工業先進国に共通する課題となっている高度福祉社会における「子ども理解」をいっそう幅広く深めることに貢献できると考えた。「教育認識」の起点である「子ども理解」を大きな世界史の中で比較教育社会史的に立体的に捉え、それを現代社会における「子ども学」の学術基盤として深めておくことは、「子ども学」の歴史学・社会学・文化人類学の学際領域を拓くにとどまらず、急速に少子高齢化社会に突入して混迷する現代社会の親子関係のあり方を考える上で、確かな論点を提供することになる。

### 3. 研究の方法

#### (研究計画の概要と方法)

研究方法・視点としては、国内と諸外国との比較、あるいは諸外国の子ども観研究の比較分析を比較教育社会史の観点から進めた。また検討対象の時期区分としては、大きく第1期の1960年代から1970年代、第2期の1980年代から1990年代初頭まで、そして第3期の1990年代から2000年代初頭までの3つの時期区分を設定し、それぞれの時期における諸外国の子ども観研究において何が論点となり、どのような「子ども理解」と「子ども学」のカテゴリーが深められたのかを明らかにしようとした。

#### (平成20(2008)年度)

初年度にあたる平成20年度には、上記の3つの時期区分に沿って、先行研究において明確にされた「子ども学」の構成に関する論点整理をおこなった。この論点整理は、以下に概観するように、各時期における子ども観研究の方法論上の特質も加味しておこなった。

子ども理解の歴史的展開を子ども文化史や子育て史、あるいは家族関係史といった、従来の教育関係史とは異なる視点で捉えようとした研究動向は、「新しい歴史学」「新しい社会史」などと表現される1960年代以降のフランスのアナール学派の歴史学、アメリカのレヴィジョニストの歴史学、イギリスのケンブリッジ学派の歴史人口学、ドイツの歴史的社會化研究などにおいて常に重要な研究関心として位置付けていた。これまで解明が難しかった教育の民衆心性の解明は、こうした社会史研究の高まりによって、新しい時間感覚にもとづいた時代区分のもと、文字資料から非文字資料(習俗、慣習、図像資料など)へと資料源を拡大し、資料解釈にジェンダーの視点を導入したり、歴史心理学的手法を援用することによって進められてきた。したがって、第1期は1960年代の、Ph・アリエスの『子どもの誕生』〔Phillipe Ariès, *L'Enfant et la vie familiale sous l'ancien régime* (1960), (杉山光信・恵美子訳)『<子供>の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』(みすず書房, 1980)が問題提起した「子ども学」の課題を論点整理すると同時に、1970年代を通じて展開された、E・ショーター〔(田中俊宏ほか訳)『近代家族の形成』(昭和堂, 1988), Edward Shorter, *The Making of Modern Family* (1975)〕、L・ド・モース〔(宮沢康人訳)『親子関係の進化——子ども期の心理発生的歴史学』(海鳴社, 1990), Lloyd de Mause, "Evolution of Childhood", in L. de Mause (ed): *History of Childhood* (New York, 1974)〕、

L・ストーン〔(北本正章訳)『家族・性・結婚の社会史——1500～1800年のイギリス(1977,1979)』(勁草書房,1991.7), Stone, Lawrence, *The Family, Sex and Marriage in England, 1500-1800* (1977, Abridged edition, 1979)〕らによる「非連続(変化)説」からの代表的な研究成果を検討した。

第2期の1980年代以降に新たな高まりを見せてきた「家族の歴史人類学的研究」は、民衆心性に関する新しい資料源を発掘・整理し、従来とは違う社会階層分析の方法を開拓し、「子ども観」、「発達観」、「親子関係」など、教育の日常的意識層を、教育政策・法制史とは違った視点で解明することが可能になった。その結果、アリエスによって提示された子ども観の「非連続(変化)説」すなわち、伝統社会と近代社会の子ども観の非連続構造を前提として、近代市民社会がそれにふさわしい新しい子ども観を「発明」し、その子ども観に必要な教育を「発明」したとする仮説の見直しを巡って展開したことを確認した。L・ポロック〔Linda Pollock, *The Forgotten Children*, 1985〕やS・シャハール〔Shulamith Shahar, *Childhood in the Middle Ages*, 1992〕、N・オルミ〔Nicholas Orme, *Medieval Children*, 2001〕らに典型的に見られるこのような反証的研究は、中世の子ども観と近代以降の子ども観の二つの領域で展開したので、本研究でもこれら二つの動向を視野に入れつつ、比較教育社会史の観点から検討を加えた。

いっぽう、1990年代以降2000年初頭にかけての第3期には、伝統社会と近代社会の子ども観に連続(共通)するところと非連続なところが併存していることが細かく実証されるようになった。その結果、子ども文化史、親子関係史、人口動態史、社会福祉史、医学史、児童文学史など、子どもを巡る政策、思想、文化、実態に関する研究が総合的に進捗したため、それぞれの領域に即して論点整理とカテゴリー分析を加えることとした。

(平成21(2009)年度)

第2年目以降の研究計画の中心は、第1年目に引き続き先行研究の渉猟と分析を行うが、とくに第2年目には、世界の子ども観研究の動向に見られる論点整理から「子ども学」の構成カテゴリーを抽出し、それぞれのカテゴリーの教育学的意義、子ども文化の解釈学、発達社会学的意味、子ども学的展望を「構造化」することを目指すとともに、わが国におけるいくつかの大学の子ども学部、子ども学科などの再編に見られる「子ども学」の構成原理の発展の可能性を探ることとする。

(平成22(2010)年度)

当初の研究計画に従って、昨年度の研究成果の一部としてまとめた二つの論文(「<人生の諸時期>の伝統と子ども期の年齢に関する比較教育社会史的研究」青山学院大学教育人間科学部紀要第1号)、および「子ども学の基礎概念に関する教育認識論的考察」青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第54号)の内容を踏まえ、さらに発展させるべく、子ども観の社会史研究、西洋教育思想史研究、教育福祉の社会史研究、子ども文化の社会史研究、などの領域に見られる近年の研究動向を渉猟しつつ、今年度は、子ども学の基本カテゴリーの構成と分布を解明することに務める。

そして、昨年度までに継続してきた、子ども学の構成に大きな示唆を与えた1960年代以降の諸外国の子ども観の社会史研究、子どもの教育の社会史研究の動向把握を引き続き行うことと平行して、昨年度から準備してきた邦訳出版の版權が取得できたので、子どもとリテラシーの社会史分野の顕著な研究成果である、D・ヴィンセント著『マス・リテラシーの時代(仮題)』(David Vincent, *The Rise of Mass Literacy*, Polity Press, 2000)と、近代福祉国家と子ども政策の分野での世界標準の研究とも言えるH・カニングガム『子ども観と教育福祉の社会史(仮)』(Hugh Cunningham, *Children and Childhood in Western Society*, Longman, 2005)(いずれも新曜社より刊行予定)の邦訳出版も進める予定である。この二人はイギリスの大学に在職中なので、今年度中に現地に赴いて研究交流を図る予定である。

さらに、世界の子ども学研究の最先端の研究情報を満載しているPaula S. Fassの編集主幹になる*Encyclopedia of Children and Childhood in History and Society*, Macmillan, 2004)の邦訳版權も、最近になって版權が取得できたため、原書房からの出版企画として、「世界子ども学研究会」の研究例会を通じて進める予定である。

#### 4. 研究成果

以上の研究計画を進めた結果、以下のことが明らかとなった。

##### (1) 基本カテゴリーの抽出

過去1世紀に及ぶ欧米の子ども観の社会史研究の成果と課題を検討することによる子ども学の基本カテゴリーの抽出は、年齢と発達問題にかかわって進めることが有効であることが明らかとなった。そこで、第1に、子どもの年齢段階の史の変容を小児医学史、人生段階の習俗史、および教育思想史の3分野から考察した、子どもの年齢段階、人生段

階論が歴史の中でどのように展開し、それが近現代以降の発達観と学校教育、とくに学級制と学年制の概念の導入にどのような影響を及ぼしたかを解明した。この成果は、論文「人生の諸時期の伝統と子ども期の年齢に関する比較教育社会史的考察」にまとめた。

また、第2に、わが国における子ども学の学説史の展開をたどった結果、1980年が20世紀のわが国における子ども学的認識の大きな転回点であったことを明らかになった。ここでは、わが国における子ども学研究の学術的経緯を再検討するとともに、近年のわが国の大学再編に見られる「子ども学部」「子ども学科」の学術的基盤の脆弱さを明らかにした。これらの成果は、論文「子ども学の基礎概念に関する教育認識論的考察」にまとめた。ほかに、世界子ども学研究会での口頭発表「ヨーロッパ子ども観史研究における教育福祉史の研究動向と基本文献」では、子ども学の構成カテゴリーの大きなセクターを占める子どもの福祉に関する社会史的研究の動向から、重要な貢献をしているカニンガム(Cunningham)とスターズ(Stearns)の研究をベースに、今後の研究課題を展望した。以上のように、多数の文献資料の収集とともに、必要な課題と展望をまとめ、ほぼ計画通りに進展させた。Paula・S・Fass編集の大きな事典『子ども学研究百科事典』の翻訳(監訳)出版(原書房より刊行予定)も、このかん発足させた「世界子ども学研究会」のメンバーの協力によって出版計画を具体化することができ、助成金を得た大きな成果となろう。

## (2) 基礎概念の定説の見直し

第1に、福祉と教育の関係を再検討するためのいくつかの手がかりを得たことが成果となった。福祉国家の登場と共に国民教育は新しい子ども観・発達観のもとに社会福祉政策の不可欠な部門として展開してきた。過去1世紀に及ぶ欧米の教育福祉政策を支えてきた子ども観の社会史基盤を解明し、子ども学研究の課題を検討することを通じてカテゴリーを抽出し、その構成と展開の学術的基盤の再構成をめざす本研究は、次の2点に絞って定説の見直しを図った。

第1は、近代教育学と子ども観の根幹をなす「子どもの発見」を巡る定説を、子ども観の社会史の観点、とりわけ「捨て子」と「野生児の発見」の観点から見直すことであった。この成果は、英米児童文学文化研究会での口頭発表「〈子どもの発見〉再考」、および論文「〈子どもの発見〉に関する教育思想論的考察」にまとめた。また、白百合女子大学大学院研究プロジェクトのセミナーでの講演「アリエス以降の50年」においてもふれた。

第2は、子ども学の全領域にかかわる重要概念のひとつ「家族戦略」(Family Strategy)の

概念に関する検討である。この点に関する研究成果として、論文「〈家族戦略〉と子どもの価値に関する比較教育社会史的考察」

(2011.3)にまとめた。さらに、子ども学の社会史的基盤を構成する児童福祉史に関する研究では、この分野における第一人者であるカニンガム教授(イギリス・ケント大学)とのインタビューをもとに、世界子ども学研究会で口頭発表したものを、論文「ヨーロッパ子ども観史研究における教育福祉史の研究動向と基本文献: Hugh Cunningham と Peter N. Stearns の研究から」にまとめた。さらに論文「ヨーロッパ美術史における〈イノセント・イメージ〉の系譜と W・A・ブーグロー」では、近代ヨーロッパ美術史における Innocent Child Images の系譜を素描し、子ども観の展開を図像学的に跡づける手がかりをいくつか提示した。

これらの研究調査活動と並行して、本研究ではカニンガム著『近代ヨーロッパの子ども観と子ども救済の社会史(仮題)』(新曜社より刊行予定)の翻訳に着手し、P・S・ファス編『世界子ども学研究事典(全3巻)』(原書房より出版予定)の邦訳出版企画も、前年度から引き続き監訳者として進めることができた。以上の研究計画と成果は、わが国における子ども学研究の学術的基盤形成に貢献できるのではないかと確信する。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 北本正章、「〈家族戦略〉と子どもの価値に関する比較教育社会史的考察: 子ども観の社会史の基礎概念(1)」、青山学院大学教育学会紀要、査読無、「教育研究」、第55号、2011、pp.1-14.
- ② 北本正章、「〈子どもの発見〉に関する教育思想論的考察——捨て子・野生児・ルソー」、青山学院大学教育人間科学部、査読無、紀要、第2号、2011、pp.45-62
- ③ 北本正章、「ヨーロッパ子ども観史研究における教育福祉史の研究動向と基本文献: Hugh Cunningham と Peter N. Stearns の研究から」、世界子ども学研究会、査読無、紀要「ハルシオン1」、2011、pp. 51-68.
- ④ 北本正章、「ヨーロッパ美術史における〈イノセント・イメージ〉の系譜と W・A・ブーグロー」、世界子ども学研究会、査読無、紀要「ハルシオン1」、2011、pp.70-74.

- ⑤ 北本正章、「<人生の諸時期>の伝統と子ども期の年齢に関する比較教育社会史的考察」、青山学院大学教育人間科学部、査読無、紀要、第1号、2010、pp. 87-111.
- ⑥ 北本正章、「子ども学の基礎概念に関する教育認識論的考察——子ども学研究の新展開に見るカテゴリーの分布と構成」、青山学院大学教育学会紀要、査読無、教育研究、第54号、2010、pp. 1-20.
- ⑦ 北本正章、「<子どもの発見>再考——その思想構造に関する覚え書き」、児童文学文化研究会、査読無、「ニュースレター」、No.2、2010、pp.2-10.
- ⑧ 北本正章、「子ども観の社会史研究における連続と非連続の問題：欧米におけるアリエス・パラダイム以降の諸学説にみる新しい子ども学の展開と構成」、青山学院大学教育学会紀要、査読無、教育研究、第53号、2009、pp.1-41.

[学会発表] (計2件)

- ① 北本正章、「<子どもの発見>再考——その思想構造に関する考察」、児童文化文学研究会、第3回研究会での口頭発表、2010年10月2日、於：青山学院大学
- ② 北本正章、「アリエス以降の50年——『子供の誕生』(フランス語版初版1960年)後の50年に見る子ども観の社会史研究」、白百合女子大学大学院研究プロジェクトのための研究講演、2010年7月29日、於：白百合女子大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

北本 正章 (KITAMOTO MASA AKI)  
青山学院大学・教育人間科学部・教授  
研究者番号：10186273